

(続紙 1)

京都大学	博士 (法学)	氏名	陳春松
論文題目	蔣介石の外交戦略と日中戦争：一九三七—一九四一		

(論文内容の要旨)

本論文は、日中戦争勃発から太平洋戦争勃発までの時期における蔣介石の対英米、対ソおよび対日外交戦略を検討したものである。日中戦争期の蔣介石の外交戦略は、「苦撐待變」すなわち持久戦を堅持しつつ、国際情勢が中国に有利に転じる時期を待つことを基本としていた。もっともそれは、消極的に時勢の変化を待つのではなく、日本を孤立させ、中国の味方を増やすために積極的な働きかけを行うことを意味していた。2006年に「蔣介石日記」が公開されて以降、彼の日中戦争国際化戦略に関する実証研究は飛躍的に進展したが、いまだ研究は十分とは言えない。本論文は、「蔣介石日記」のみならず、中国語、日本語、英語の各種一次史料を駆使して、日中戦争国際化戦略の内実をより詳細に解明した。

本論文は全四部で構成されている。第一・第二部では、蔣介石の日中戦争国際化戦略において最も重要な部分であった対英米外交を分析している。蔣介石は、最終的には太平洋戦争勃発後に英米と同盟関係を結び、連合国対枢軸国という形で日中戦争を国際化することに成功したが、それまでの過程は紆余曲折に富んでいた。英国はヨーロッパでドイツ、イタリアからのプレッシャーにさらされていたため、極東において日本との関係を悪化させることを躊躇し、しばしば日本に譲歩した。一方、米国は国内の孤立主義思想の影響力が極めて強かったため、極東の事案に過度に関与せず、他国と連合して行動することを避ける傾向があった。蔣介石は日本が英米の不一致を利用して中国侵略を進めることを深く懸念し、一貫して英米に一致した行動を求め、積極的に両国の提携を促した。筆者は、蔣介石が対英米外交を一体のものとして行っていたことに注目し、蔣介石の葛藤、飛行機をはじめとする武器支援の実態などに焦点を当てつつ、この過程を具体的に明らかにした。

第三部では、蔣介石の対ソ連外交について検討した。先行研究は、蔣介石の対英米外交に比べて、対ソ連外交には十分に関心を払ってこなかった。これに対して本論文は、実際には蔣介石がソ連を非常に重視し、同国を対日戦争に引き込むことで日中戦争の国際化を実現しようとしていたこと、彼が日ソ戦の勃発を大いに期待し、そのための働きかけも積極的に行っていたことを詳細に明らかにした。筆者は、蔣介石が熱心にソ連を対日戦争に引き込もうとしたのは、彼がソ連および共産主義に対して根強い不信感を有していたこととも関係していたと指摘し、彼の反共思想と対ソ連外交、対日外交との関係性についても注意を払っている。

第四部では、蔣介石の日本観や日本の国内情勢に対する洞察について検討した。筆者は、蔣介石が中国の抗日戦が最終的には必ずや勝利に終わるという自信を持っていたとし、その自信を支える要素として、日本の内部崩壊に対する期待が存在していたと指摘している。他方で、蔣介石は日中戦争をアジア同士の「共食い」だと捉え、日本が自己反省して、中国に対する武力侵略を放棄することにも期待を寄せていたとも指摘している。将来的に日中両国が恨みを解消し、誠意をもって提携することは蔣介石の一貫した希望であり、それが第二次世界大戦後の蔣介石政権と日本の接近の一つの背景になったというのが筆者の解釈である。

本論文は、蔣介石が「敵」と「友」をどのように位置づけていたのかによく注意し、戦前、戦中、戦後を通観することに留意しながら、彼の英米、ソ連、日本に対する外交戦略を実証的に跡付けた。また、アジア主義的思考や英米と中国が対等であるべきだという意識など、彼の外交政策を根底で支えていた思想についても踏み込んで分析を行なった。筆者は以上の考察を踏まえて、日中戦争期の蔣介石の外交指導の最終目標は、抗日戦争に勝利することにとどまらず、近代以降の中国が失った独立、自由、平等を取り戻すことにあったと指摘している。また、蔣介石を「戦略的ビジョンを持つ政治家」であったとし、彼が「日中戦争という枠を越えて、戦後の中国ひいてはアジア全般を常に長期的視点から見ている点を評価すべき」とであると結論づけている。

氏名	陳春松
----	-----

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、日中戦争勃発から太平洋戦争勃発までの時期における蒋介石の対英米、対ソおよび対日外交戦略を検討したものである。日中戦争期の蒋介石の外交戦略は、持久戦を堅持しつつ、国際情勢が中国に有利に転じる時期を待つことを基本としていた。もっともそれは、消極的に時勢の変化を待つのではなく、日本を孤立させ、中国の味方を増やすために積極的な働きかけを行うことを意味していた。2006年の「蒋介石日記」公開以降、彼のこうした日中戦争国際化戦略に関する実証研究は飛躍的に進展したが、いまだ研究は十分とは言えない。本論文は、「蒋介石日記」のみならず、中国語、日本語、英語の各種一次史料を駆使して、蒋介石の外交戦略の内実を詳細に解明した。

本論文は全四部で構成されている。第一・第二部では、蒋介石の外交戦略で最も重要な部分であった対英米外交について分析している。蒋介石は日本が英米の不一致を利用して中国侵略を進めることを深く懸念し、一貫して英米両国の提携を促した。筆者は、蒋介石が対英・対米外交を一体のものとして行っていたことに注目し、飛行機をはじめとする武器支援の実態などに焦点を当てつつ、多面的な分析を行った。第三部では、先行研究が十分注意を払ってこなかった蒋介石の対ソ連外交について検討している。本論文は、蒋介石がソ連を非常に重視し、同国を対日戦争に引き込むことで日中戦争の国際化を実現しようとしていたこと、彼が日ソ戦の勃発を期待し、そのための働きかけも積極的に行っていたことを詳細に明らかにした。第四部では、蒋介石の日本観や日本の国内情勢に対する洞察について検討している。筆者は、蒋介石が最終的に抗日戦は勝利に終わるという自信を持っていたとし、その自信を支える要素として、日本の内部崩壊に対する期待が存在していたと指摘している。他方で、将来的に日中両国が恨みを解消し、誠意をもって提携することが蒋介石の一貫した希望であり、それが第二次世界大戦後の蒋介石政権と日本の接近の一つの背景になったという解釈も提示している。

本論文の分析は、ともすると「蒋介石日記」の記述をなぞる形になっており、他の一次史料による検討が不十分に終わっている部分がある。また、「蒋介石日記」の史料的性格、先行研究との解釈の相違が必ずしも十分に示されていないこと、中国共産党の動向など中国国内の政治情勢についてあまり書き込まれていないことも問題である。しかし、筆者が日中戦争期の蒋介石の外交戦略を一次史料に基づいて内在的に把握し、それが各国毎、時期毎にどのように変化したのかを丹念に明らかにしたことは、高く評価されるべきである。筆者には、今後こうした課題を克服し、本論文を基礎とする研究成果を広く発信していくことを期待したい。

以上の理由により、本論文は博士(法学)の学位を授与するに相応しいものであり、かつ、学界の発展に資するところが大きく、特に優れた研究であると認められる。また、令和6年1月26日に調査委員3名が論文内容とそれに関連した試問を行った結果合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： _____ 年 _____ 月 _____ 日以降